

六花



RIKWA

2

俳句雑誌りつか

2016 (平成28年)

cover design Yuna Mizuno

福は内わだば俳句の鬼になる

てん鞠のごとく千鳥の水に落つ

山水の飛び出せるまま氷りたる

野焼して空へ戻しぬ草の霊たま

神の岩寒九の水に包まるる

金継きんつぎを指にめでをり初点前

陵みさとぎに凍てしそよごの実を拾ふ

序のことをいまだあれこれ松の明け

武田の虎謙信の龍どんど焼

遠山に雪なし寒波もう来るか
座くら移しゐたるオリオン惜しみけり
薄氷うすらいを木の葉一枚離れゆく
喪中かなぽつぽつぽつと寒見舞
生姜湯に誤飲をするも風邪ごもり
夜畑に鴨のうごめきをりにけり
霜枯の菜畑に雨つのりけり
けふもまた馬面はげの鍋とせむ
水回りつぎつぎ壊れ暖房も

掴みたる蝗に雨の匂ひかな
山茶花の一片ひろふ土の橋
先陣の鴨の曳きたる水尾の濃し
刈株に光宿れり時雨あと
葦枯れて葉ずれの音のやさしかり
洩るる灯に夫の寝返る霜夜かな
夫の手の錠剤かぞふ小春かな
母あらば百の齢に日向ぼこ
俎板にしむる青さの葉葱かな
冬晴の三面鏡を開きけり

秋草にほどなく暮るる日のありぬ 藤生不二男

あきくさにほどなくくるるひのありぬ ふじおふじお

秋草にほどなく暮るる日のありぬ

刈株の隠るるほどに穠生ふ

海峡に日の差しきたる時雨かな

山の日のたちまち戻る帰り花

そこいらの鴉寄りくる冬田かな

「ほどなく」という言葉を見つけたのがいい。これが、夏草や春の萌える草、冬草では「ほどなく」が生きてこない。秋草に目を止めた時刻から何分もしないうちに釣瓶落しに暮れて行く。そのわずかの時間をいとおしく思う、「詫び寂び」がよろしい。気持ちにゆとりのある詠みぶり、これこそ味わえる句であり、何もしないことが芸。句の説明は却って雰囲気壊しそうな気がする。

渋柿に口を盗られてしまひけり

升田ヤズ子

しぶがきにくちをどられてしまひけり ますだやすこ

寄りかかる幹しなやかに竹の春

源流の音の高まる花芒

渋柿に口を盗られてしまひけり

神南備山のしぐれに道の細りけり

萱の穂の瘦せれば沼の光りけり

女性が口を盗まれた、というのはただ事にあらず。しかし、柿の渋みの中に広がって、味覚が麻痺したことを口を盗られたと言ったのだ。主宰の孫も小さいとき雪の六甲山に遊んで「雪が手を噛んだ」とべそをかいた。そういう感覚に通じようが、ヤズ子は大人の女性としてこのような表現を選んだ。加賀に千代女あれば尾上にヤズ子あり。下五を「もらひみず」とパロディ化したくなるのは覚えやすく後世に残りやすい証拠である。

雪卿集

狐
火

佐津のぼる

山峡に人の世の火か狐火か
洲になびきぬるも一景枯尾花
やはらかき嬰抱かさるる小春かな
冬耕や老ひたる鋤を高く振り
冬空にテ口の半旗を掲げたり

五年日記

松本文一郎

先行は五年日記か三年か
寒月や葦酒の入れぬ山門に
寒月の香典袋照らしくる
出荷後の轍くつきり霜の道
見向かれぬ不浄の方位実南天

雪卿集

秋の海

志方章子

彼岸花剪れば生水きみずのあふれけり
待宵や鳥の煌めきあるばかり
秋の海走りあるかに列車の灯
朝顔の実を取りおかむ雨止まば
秋祭文書きをれば太鼓の音

冬紅葉

出口

誠

ご近所のクレーム受けて落葉掃く
煌々とマンションの灯の初冬かな
うず高く積まれしがれき冬の夜
鮮明に鈍さはせて冬紅葉
冬紅葉裏に緑の残りけり

雪樹集

どんぐり笛

田尻
勝子

鍋焼きにローレル一枚騒ぎをり
息吹けばどんぐり笛の悲鳴かな
水に漬く刃数本秋刀魚かな
椎の実の三本錐の集まれり
柿紅葉物もつ相飯そうめしの乗せてあり

白さざんか

廣畑
育子

鯨日和水脈の綾なす播磨灘
切岸の羽色を濃く秋の鳶
周濠えんりょうに白さざんかの見頃なる
媛陵えんりょうに逃げてゆきたる番ひ鴨
陪塚ばいちようを動かず殿様ばつたかな

蛍雪譚

六甲選



二十八年二月号鑑賞

さて、歌のことではあるが、俳句にも関係する「ものゝあはれ」の用例は『土佐日記』まで遡る、と小林秀雄は『本居宣長』（新潮社刊）で言う。主宰が去年政子たちに要求したのは、それである。

鹿兒の崎を船出しようとして、人々、歌を詠みかかはし、別れを惜しむ中に、楫とり（船頭）、ものゝあはれとも知らずで、おのれし酒をくらひつれば』（『土佐日記』）とある用法で、貫之が示したかったのは、「ものゝあはれ」と呼べば、歌の心得ある人は、誰も納得する、と彼が信じた、歌に本来備はる一種の情趣である。周知のやうに、貫之の『古今集』序は「人麿なくなりたりにけれど、歌の事、とどまれるかな」といふ自信に溢れた、歌の価値や伝統に関する、わが国最初の整理された自覚である「古今序」に、やまと歌は、ひとつ心を、たねとして、萬のことのはとぞ、なれりける、とある。此ころといふがすなはち物のあはれをしる心也とも。思慮易選、愛染相変といへるも、又物のあはれをしる也（石上私淑言、巻一）

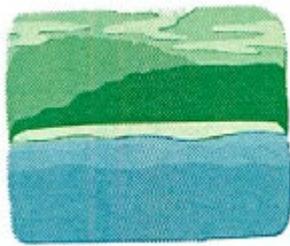
など宣長の挙げた歌を一首、「恋せずば人は心もなからまし物のあはれもこれよりぞ知る 俊成」。それを埋めよう、と政子は努めた。もともと政子たちに備わっていた「即ち人ノ心ノアル也」を呼び出した「あはれ」は「源氏物語」や「狭衣物語」などからも汲み取れるだろう。政子に限らず「人は人によって、心は心によって、俳句は俳句によって磨かれる」と今年も信じて……。

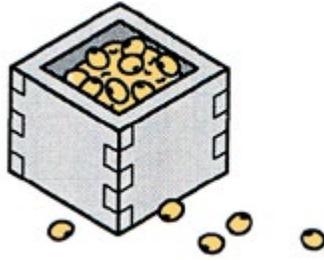
山峡に人の世の火か狐火か 佐津のぼる

人の世の火かと疑っているのは紛れもなくこの世の人の灯す火ではないような気がするという。このような怪しい火を昔は狐火とよんで気味悪がった。山間部では今でもそのような怪しい火が見えるときがある。昼間の場合は正体不明の煙などを「猪が煙草を吸ってる」、と言って多少ユーモアを含んで言ったが、夜は見えにくいだけに妄想も絡んで、狐をやり玉に上げたにちがいない。狸で無いところに怖さ充分。

先行は五年日記か三年か 松本文一郎

「先行」はさきゆきと訓む。これから先何年生きられるかを心づもりに五年にあずるか三年にするか迷っている。人は平均年齢に近づいてくると、毎年日記が店頭に並べられる頃になると迷ってしまい、自分に当てはめて弱気になる。しかし強気に出て五年日記を買おうと、神の怒りを買って裏目ですうな気もしてしまう。大いに迷うのである。いつそ現実離れした二十年日記を買う方が……などと。〈以下略〉





2年号
到着順

平居 濤子

秋天を北へ延びゆく飛行雲
短日の児童横断見守り隊
古希の会流れ小春の動物園
愛誓ふ絵馬に冬日のあたりけり
極月や視野欠けし目で追ふ活字

菊谷 潔

いとほしき一葉となり蔦紅葉
大銀杏落葉掃く家隣あり
好いたらしい風に散る気の紅葉かな
木の葉散る自由と不安なひまぜに
菊の香や人気なき日の仏たち

小林はじめ

吾が里の子供歌舞伎の舞台かな
去年今年生きて齢を重ねげり
清貧の吾も心の年用意
子日草手持ちしままに丘に立つ
世の慣ひつもごり蕎麦を食みにけり